

(ARC「宗教と自然保護の関連性」との連携によって継続されている。

多様な宗教伝統が共存しているインドで多くの宗教的価値観の中から自然保護に最も有用なものを探し出すことは、自然世界を保全し、あるいは回復しようとする人々にとってひとつの挑戦なのであろう。

輪廻と環境

——インド仏教の自然観再考——

渡辺章悟

インド仏教の自然観は、業の理論にもとづいた輪廻説と、生きとし生けるものの共通の働きである共業が環境世界を創造すると説く点に大きな特色がある。それは人間を含めた生命や環境世界を一体として捉え、関係性を起点に各自の役割を考察する。本発表はその自然観を、三つの世間説・業説・生命観を踏まえ、生命環境論の可能性を考えて行く。

伝統的な仏教の世界観は三界、三世間と言った三層構造によって理解されている。

A 三界・三界とは①欲界 (kāma-dhātu)・②色界 (rūpa-dhātu)・③無色界 (arūpya-dhātu) の三つの総称であり、それぞれ、①欲望にとらわれた境域、②欲望は超越しているが、物質的条件にとらわれた境域、③欲望も物質的条件も超越し、精神的条件のみがある境域を区分し、へ生きとし生けるものは

これら三つの境域を輪廻する」と考えている。

B 北伝の三世間・三世間は北伝と南伝の別がある。北伝の三世間は「五衆(蘊)世間・衆生世間・国土世間」の三種に分類される(『大智度論』大正 Vol. 25, 546c1-3)。衆生世間のサンスクリット原語は「生きものの世界」(sattva-loka)であり、器世間のサンスクリット原語 (bhājana-loka) は、文字通り「容器としての世界」の意である。

C 南伝の三世間・パーリ仏教でも表現は少し異なるが、上記の三世間と同様の三分が『清浄道論』(Visuddhimagga)、『世間灯明精要』(Lokappadīpakasāra) などの世界の構造を述べた記述に見られる。これらは以下のように北伝の三世間に対応している。

(1) 現象世間 (saṅkhāra-loka 行世間) → 智度論の「五蘊世間」

(2) 有情の世界 (satta-loka 有情世間) → 五趣の世界 → 智度論の「衆生世間」

(3) 空間の世界 (okāsa-loka 器世間) → 智度論の「国土世間」ただし、北伝仏教では「容器としての世界」(Skt: bhājana-loka) というが、南伝仏教では「空間としての世界」(Pali: okāsa-loka) という (Lps, Vis p. 204, DA vol. I, p. 173)。

周知のように仏教では業説によって人間の境遇や世界を規定している。有情の業には身口意の三つの働きがあり、その行為の結果によって各自の生き方が決まる。これを『大毘婆沙論』(No. 1545, vol. 27, 649a18ff) では「契経に説くがごとし、仏は摩訶婆に告ぐ。世間の有情は皆自業に由る。皆是れ業の

パネル

分なり。皆業より生じ、業を所依と為す。業は能く諸の有情類の彼々の処所・高下・勝劣を分判す」と説く。しかし、器としての世界はそうではない。すなわち、「有情の類、此の処所に於いて共業増長すれば、世界便ち成じ、共業若し尽きれば世界便ち壊す。」(『大毘婆沙論』692c18)

有情は自ら所作した業(不共業)の別によつて、それぞれが種々の異熟の果報を受けるが、世間は自ら業を為すことがないので異熟果を受けることもない。一方、世間は有情の共通の業によつて生滅する。この世界の生滅にかかわるのを「共業」(saharapa-karman)という。これは他人と共有しうる結果をもたらす行為の力であり、世界を現象する原因である。山河大地などの環境世界は、多くの人々が共通に享受できるものであり、「共業」の結果である。この業の理論が輪廻と環境という世界創造の仕組みを解説するポイントとなる。そして、インド仏教の自然観もこの一連の考察の中で、捉えることができる。

日本仏教とエコ・フィロソフィ

竹村 牧男

仏教では、一個の衆生の身・心は、器世間に置かれて、生きていると認識しており、器世間の問題をけつして無視してはいない。仏教では、身・心と器世間、正報と依報、衆生と国土と

を、常にセットとして捉えているのである。

我々は過去世の業果として、人間界に生まれており、人間の身体を有している。この人間の環境世界は、娑婆とも言われ、穢土とも言われている。その環境と我々の個体は、決して切り離せないのである。しかし心を浄化することによつて、よりよい環境に生まれ得るといふ。

一方で、この世界は本来、浄土であるとの見方もある。『法華経』「如来寿量品」に、この娑婆世界は、実は久遠実成の仏のいます浄土であると主張されている。ちなみに、『法華経』に基づく天台宗の、一念三千の思想は、このことを理論化しようとしたものと見ることができであろう。

また、このことの表現の一つを、天台宗における「草木国土悉皆成仏」の議論の中に見ることができる。この句は日本の天台宗の教学研究の営みの中で作られたと考えられ、この思想の背景にある哲学・論理について、たとえば天台宗の忠尋(一〇六五―一一三八)作と伝える『漢光類聚』(実際には、一二五〇年ころの作らしい)には、まとまった形で示されている。これによれば、「草木国土悉皆成仏」の句は、「草木国土も成仏できる」という意味よりも、「草木国土は悉皆、成仏している」という意味にとるべきものである。

このように、人間世界の環境世界も仏を本体としていたの思想は、空海の密教にも示されている。一例に、『卍字義』には、「常遍の本仏は、損せず虧せず。汗字の実義は、汝等応に知るべし。水外に波無し、心内即ち境なり。草木に仏無くんば、波に則ち湿なけん。彼れに有つて此れに無くんば、権に非